

合理的受容可能性と真理

横山 幹子 (Mikiko YOKOYAMA)

筑波大学図書館情報メディア研究科

真理が合理的受容可能性を超えていると考えるかどうかは、われわれが手にする知識の確実性に大きな影響を与える問題である。われわれが知りうるのは外的な対象とわれわれの間にあるインターフェースだけであるとし、われわれが決して見つけることができない間違があるということを含意する形而上学的実在論を、自然な実在論・常識の実在論を主張している Putnam は、否定する。その考えは、われわれが確かなことを知ることができる点で、非常に魅力的である。しかし、それは、合理的受容可能性を超えた真理がありうると考える点で、内的実在論期の Putnam の考えとは異なる。形而上学的実在論にならずに認めることのできる合理的受容可能性を超えた真理とはどのようなものなのか、それを認めることは適切なのか、それを認めることと自然な実在論・常識の実在論はどのように関係しているのか等に関して、Putnam の議論を下敷きにしている Wolfgang Kühne の議論を手がかりに考察することが、本発表の目的である。

Kühne は、その論文「Alethic 反実在論から Alethic 実在論へ」(“From Alethic Anti-realism to Alethic Realism”. *Hilary Putnam: Pragmatism and Realism*. Conant, J.; Žegleń, U. M., ed. London & New York, Routledge, 2002, p. 144-165.)の中で、真理に関する態度によって、反実在論と実在論を区別している。

Kühne によれば、Alethic 実在論とは、真理が合理的受容可能性の範囲を超えていると主張するものである。つまり、その考えでは、正当化された信念の内容では決してありえないが、われわれが理解することができる真なる命題があるとするのである。ただし、彼によれば、そのように理解された実在論は、Putnam の言う形而上学的実在論とは違って、見つけることのできない間違の可能性を認める必要はない。また、それは、必ずしも、二値の原則と結びつけられない。

それに対して、Alethic 反実在論とは、真理は合理的受容可能性の範囲を超えないと主張するものだと、Kühne は言う。つまり、すべての真理は、正当化された信念の内容になりうると考えるのが、Alethic 反実在論の特徴なのである。ここでは、「なりうる」ということが重要である。ここで考えられている反実在論は、現時点で、すべての真理が、正当化された信念の内容であるという極端なものではない。

そのように、実在論と反実在論を分けたうえで、Kühne は、Alethic 反実在論には、真理述語が認識的述語と同じ意味を持つと主張する、定義的 Alethic 反実在論と、そうは考えない非定義的反実在論があると言う。そして、内的実在論を主張していた頃の Putnam の考えが、非定義的 Alethic 反実在論であると述べるのである。なぜなら、Kühne の解釈では、内的実在論を主張していた頃の Putnam は、いずれにせよ、真理をある種の合理的可能性であるとしており、その一方で、真理と合理的受容可能性(た

とえ「理想化された」ものであるとしても)を同一視することを疑問視しているからである。

しかし、自然な実在論・常識の実在論を主張するに至った Putnam は、上記の立場を間違っていると考えていると、Künne は言う。彼によれば、Putnam は、地球外生命体の例を挙げて、真理が合理的受容可能性を超えうるということを主張し、そしてそのことによって、真理が合理的受容可能性を超えているということを言えたと考えているが、Putnam が示していることは、「決して合理的にそれを受け入れないにも関わらず、われわれが理解することができ、真でありうる命題がある」ということだけであり、「それを受け入れることが決して合理的でないとしてもわれわれが理解でき真である命題がある」ということは示されていない。Künne は、後者のような命題を示すことによって、Alethic 実在論を擁護しようとするのである。

そのために行われる Künne の議論は、Fitch の議論をもとにしている。しかし、Fitch の議論とは異なり、反実在論者に逃げ道を与えないように、知識ではなく正当化された信念を問題にし、直観主義者が退ける原理を使わず、様相も使わないことによって、Künne は、真であるものは何でも正当化された信念の内容でありうるという穏健な Alethic 反実在論に反論しようとするのである。議論は以下ようになる。

その議論が否定するのは、Künne がすべての Alethic 反実在論に共通のものと考えている、「その命題が真であり、かつ、正当化された信念の内容であるという仮定が矛盾を含むような真なる命題はない」(ComDen(Common Denominator))という考えである。その際使う規則は、「&-導入」・「&-除去」および、「T (A) (A という命題が真である)」という前提から A という結論が出てくる」という規則 (真理除去)・「 \exists (A & B) (A & B という命題が、いつかあるとき、正当化された信念の内容である)」という前提から、 \exists (A) という結論が出てくる。 \exists (A & B) という前提から、 \exists (B) という結論が出てくる」という規則 (\exists のもとでの &-除去) だけである。そして、その際使われる具体的な例としての二つの命題は、「 (Σo) 今私の頭にある髪の毛の数は奇数である。しかし、そうであると信じるように誰も正当化されていない」と「 (Σe) 今私の頭にある髪の毛の数は偶数である。しかし、そうであると信じるように誰も正当化されていない」である。「今私の頭にある髪の毛の数は奇数である」を O とする。

| | | | |
|-----|-----|------------------------------------|--------------------------|
| 1 | (1) | T (O & $\neg \exists$ (O)) | 仮定 |
| 1 | (2) | O & $\neg \exists$ (O) | 1 と真理除去 |
| 3 | (3) | \exists (O & $\neg \exists$ (O)) | 仮定 |
| 3 | (4) | \exists (O) | 3 と \exists のもとでの &-除去 |
| 1 | (5) | $\neg \exists$ (O) | 2 と &-除去 |
| 1,3 | (6) | \exists (O) & $\neg \exists$ (O) | 4 と 5 と &-導入 |

偶数だと考えた場合も同じ議論ができる。しかし、 (Σo) と (Σe) どちらかは真である。(ComDen)は否定される。従って、Alethic 実在論は正しい。

本発表では、このような合理的可能性を超えた真理を主張することに問題点はないのか、また、このような合理的受容可能性を超えた真理が、自然な実在論・常識の実在論とどのように関係するのか、について論じる。